

ダニエル 9 : 1 - 11 (パウポ)

Preface

ダニエルは、10代の青少年と言われる年に捕虜としてバビロンに連行されて、80代、そして一生を、初志貫徹する人生を生きました。

何を初志貫徹したのか？

唯一まことの神を信じる信仰に生きるということを、初志貫徹しました。

与えられた信仰を最後まで守り通し、人生における様々な決定を下さなければならぬ場面で、神を第一にし、神の御旨に適う決定を下し続けながら、生きていくということがどんなに大変か、今更ながら、私自身日々思わされています。

ましてや、ダニエルの人生は、自分の思い通りに行くことが何一つないような、自分の臨んだ条件が何一つ整っていないような環境下で、唯一まことの神を第一にし、信じ、その方の御旨に適う決定を下していくということを、初志貫徹した、まさしく信仰の人でした。

じゃあ、どのようにして、ダニエルが、キリスト者として初志貫徹する人生を生きることが出来たのか？

今日の聖書箇所は、それを私たちに良く教えてくれます。

Part One

まず、ダニエルが今、どういう状況に置かれているのかを見てみましょう。

ダニエル 9 : 1 (パウポ)

ダニエル書 5、6 章を学んだ時、詳しく見ましたが、この 9 章の背景は、バビロンという帝国が滅び、そして、メディア・ペルシアというバビロンを凌ぐ大帝国が興った時の話です。

バビロンの捕虜として捕まってきて、70年、色々あったけれども、神が共にいてくださり、神の恵みによって、人からも信頼され、また認められ、それなりの社会的な地位も与えられ、その歩みがすべて神の祝福だったと告白できる人生を歩んできましたが、

ここで、自分が属し、仕えてきたバビロン帝国が滅びてしまいました。

そして、新たに、メディア・ペルシア帝国のダレイオスが王となって、ダニエルが暮らしていたバビロンの都を受け継ぐこととなりました。

人生の終盤に差し掛かっただろうと思われる80代半ばにして、国の統治が変わるといふ、再び大きな大変革を経験するのです。

バビロン帝国の元高官ではあったものの、ダニエルの出生は捕虜です。

メディア・ペルシアに権力が移ったことをもって、ダニエルのそれまでの功績がすべて水の泡となり、再び捕虜としての扱いを受けてもおかしくない不安な状況に追いやられました。

ダニエル自身のみならず、イスラエル民族はどうなるのだろうか？
私たちイスラエル民族に将来や未来はあるのだろうか？
バビロン帝国の滅びと一緒に、我々も、亡き者とされているのだろうか？

この上ない不安と心配の中に、再び、追いやられていきました。

そして、そこで、ダニエルが取った行動が、2節です。

ダニエル9：2 (パワポ)

時代の過渡期、人生に一度あるか無いかというほどの不安の中で、ダニエルが取った行動は、聖書を読むことでした。

そして、読んだ聖書の言葉から悟りを与えられるんです。

では、どんな悟りを与えられたのか？

それは、70年という神が定めた時が満ちて、イスラエルが回復するという悟りでした。

思ってもみなかった言葉でした。

今、ダニエルが最も、不安で、心配している自分たちの処遇、イスラエル民族の将来と未来が、ペシャンコになってしまうんじゃないかという思いに包まれている中の、神様の救いの言葉でした。

神に逆らい、神の言葉に聞き従わず、神の信頼を裏切り、神に対して罪を犯した結果、自ら招いてしまった神の裁きと荒廃の期間が終わり、イスラエル民族に解放が起こり、自分たちの祖国、故郷に帰る日が来たんだという、驚くばかりの喜ばしい事実を悟らされました。

これこそ御言葉です。

困難の中に解放を宣言するのが、聖書の言葉です。

ダニエルが、キリスト者として初志貫徹する人生を生きることが出来た大きな秘訣のうちのひとつは、

困難や問題にぶち当たる度に、神の言葉に、聖書の言葉に、近づき、読み、聞き、与えられる悟りと気づきを享受したことでした。

Part Two

私自身も含めて、時折、残念に思うのが、普段は聖書をよく読み、聖書の言葉を密にしている人たちが、何か問題や危機に直面した時、正にその時こそ、本当に聖書の御言葉が必要な時、聖書を読まないんです。

聖書を読む代わりに、人を尋ね、専門家のアドバイスを仰ぎ、本に答えを求め、中には占いに頼ったり、占い師のところにまで行ってしまいう始末です。

前回のメッセージの時でも触れましたが、敬虔なのは見かけだけですね。

見かけは敬虔であっても、敬虔の力を否定する者となってしまうんです。

そんな人たちにとって聖書の言葉は、人生の問題に具体的に解決を与えてくれるものではなく、

教養であり、またはクリスチャンらしくあるために身に着ける装飾であり、または、現実問題にはそぐわない、現実問題の具体的な解決にはならない、何か異次元空間のよくわからないスピリチュアルな意味不明な言葉のようであります。

そして、結果的にそんな扱いをしてしまっていることにさえ、気づきません。

困った時こそ、聖書なのにです。

困った時こそ、聖書なのに、困った時には、人の言葉。世の常識や博識。専門家。

もちろん、それらも、(表面的な)一定の助けを与えてくれますが、根源的なものは、一切解決しません。

もっと言えば、普段、聖書の御言葉を身近にしたり、読まなかったとしても、何か問題にぶつかった時こそ、危機に直面した時こそ、聖書を読むんです。

それこそ、敬虔の力を肯定することですね。

ダニエルがそうでした。

ダニエルは、聖書の言葉という敬虔の力を肯定しました。

ダニエルは、困った時こそ神の言葉、非常事態の時こそ聖書の言葉でした。

ダニエルと、すみません。私たちの違いは、ここに 있습니다。

私たちは、ダニエルから、学ばなければなりません。
神様は、ダニエルを通して、明らかに私たちに知って欲しいことが御有りです。

ダニエルは、混乱と不安という過渡期中で、御言葉を握りました。

そして、その握った御言葉を通して、自分の人生の最も大きな課題について、重要な悟りを与えられるのです。

ダニエル 9 : 2 (パワポ)

ダニエルは、困難な時こそ、聖書の御言葉に期待し、御言葉を読みました。
そして、エレミヤ書の言葉が、民族の解放、祖国の復興という大きな喜びを、
ダニエルに与えてくれたわけですね。

皆さん、御言葉とは、こういうものですね。

たとえ、死の影の谷を歩むようなところにあっても、不安と恐れに包まれてい
るようなところにあっても、御言葉をもって、神様は、人の与えることの出来な
い希望をお与えくださいます。

詩篇 119 : 92-93、50 (パワポ)

神の御言葉は、私たちを生かします。
神の御言葉は、私たちの根幹的な喜びになります。
神の御言葉は、私たちの悩みの時の慰めです。
神の御言葉がなかったら、私たちは、苦しみの中で滅んでしまいます。

Part Three

では、果たして、私たちの生き方は、神の言葉から悟りを得て、神の言葉から
力を得て、神の言葉から答えと解決を得ている生き方でしょうか？

それとも、聖書の言葉は、クリスチャンらしくあるための、ただのお飾りでし
ょうか？

神の言葉を慕う者たちは、
神の言葉が私という人を生かし、
神の言葉こそ喜びであり、
神の言葉こそ慰めであり、
神の言葉こそ解答であることを体験します。

これまでも何度かお話ししてきましたが、今からちょうど5年前、正直もう牧
師を辞めたくて、めぐみ教会での働きを辞めて、アメリカに逃げました。

でも、逃げた先が神学校です。

牧師を辞めたいという思いなのに、そこしか行くところがなくて、行ったのがフラー神学校でした。

アメリカに逃げれば、少しは気持ちも楽になり、解放されるかと思ったのですが、もう毎日が不安不安で、怖くて怖くて仕方がありませんでした。

神学校で勉強することも怖いですし、出された課題をこなすのも怖いですし、人と会うのも怖いですし、何よりも怖かったのが、お金が底を尽いて路頭に迷うかもしれないという怖さが何をしても付いて回りました。

家族一同、荒野に投げ出された気持ちになり、あとは干からびて、死んで行ってしまうかもしれないという思いにさえなりました。

一緒に入学した留学生の中にはたくましい方々もいて、家族を養うために勉強はそこそこに、知り合いのつてを頼りに就職して、毎日寮から出勤する方もおられました。

でも、私は働くことも怖くて、働くことなんか考えることも出来ませんでした。

こんな時、家内はたくましかったですね。

1ドル使うのにもオロオロのに、日曜日の礼拝の献金の時間に、その時財布にあった60数ドルあったお金全部、小銭まではたいて献金したんで、びっくりして、「え、大丈夫？」って、聞きましたら、「大丈夫！ 神様が養ってくださるから！」って言うんです。

もう返す言葉がないですよ。

本当に奥さんの信仰で3年間生かされました。

そして、申命記の言葉を実体験しました。

申命記8：2－6（パワポ）

というこの言葉を実体験しました。

結果的にはこの御言葉を実体験するのですが、その最中では、先ほども言ったように、怖くて怖くて仕方がありませんでした。

怖くて怖くて仕方がなかった最中、でも、ひとつだけ出来ること、いや、ひとつだけしなければならぬこと、いや、これだけでもしなければ、僕の存在している意味はないと思ったことがありました。

それは、3節にある

人はパンだけで生きるのではなく、人は主の御口から出るすべての言葉で生きるとのこと 申命記 8 : 3 (パワポ)

です。

本当に人は、主の口から出る言葉によって生きるのか？

これだけは、信じて確認しなければならないと思いました。

だから、何はともあれ聖書は読む。

苦しくても聖書は読む、時間がない時こそ聖書を読む。

やらなければならないことが山積みの時こそ聖書を読む。

つらい時こそ、不安で心配で怖くて仕方がない時こそ、聖書を読むことだけは、あきらめちゃいけないと思い、出来る限り実践しました。

毎朝、図書館に行く前に、図書館の前にある「Prayer Garden 祈りの園」に必ず寄って、祈ってから、聖書を読みました。

課題がたくさんある時や、いつも座っているお気に入りの席が埋まってしまうかもしれないぐらい遅刻した時や、気分が乗らない時も、Prayer Garden に必ず寄って、祈って、聖書を読んでから、図書館に行きました。

その時使っていた聖書は、私の宝物です。

また指導教官のキョン・スー先生は、私に「牧師ならば最低1年に3回は聖書通読、または聖書聴読をしなければなりません。それこそ、牧師の生命線です。」と良くおっしゃりながら、Eugene Peterson が書いた「Eat this book」という本を紹介してくださいました。

直訳すると、「この本を食べなさい」、意識すると「この聖書を食べなさい」という題の本を紹介してくださいました。

もう、本のタイトルからして、ストレートですね。

「この本を食べなさい」、「この聖書を食べなさい」、「この神の御言葉を食べなさい」。

神の御言葉は、私たちの命を保つための食べ物です。

これなくして、人は、生きられないですね。

今は生きてるように見えても、やがて枯れ、朽ち果てて行きます。

だから、今年の主題聖句、イエス様は、「ともに食事をしよう」とおっしゃるんです。

ダニエルは、困った時こそ、神の御言葉を食しました。
そして、その食べた御言葉を消化して、栄養分とするためにしたことがありました。
祈りです。

Part Four

ダニエルは、困難な時こそ神の御言葉を近くに、御言葉を読みましたが、その読んだ御言葉から与えられた悟りを、祈りにつなげて行きました。

ダニエル9：4 (パワポ)

これが、もう一つの、私たちがダニエルから学ばなければならないことです。

ダニエルは御言葉を読んで、「ああ、今日も聖書読んだ。」と言って、自己満足して終わりません。

または、「今日のお勤めご苦労様でした。」というように、聖書を読んだということ、
「ああ、今日も敬虔なクリスチャンやれた。」と、自分の手柄にして、終わるようなこともしません。

ダニエルは読んだ御言葉から教えられたこと、感じたこと、悟ったことを深刻に受け止めて、深い祈りにつなげて行きました。

(その祈りの内容については、今度のメッセージの時に詳しく触れていきたいと思うのですが)

「今日も聖書を読める時間を下さり、感謝いたします。今日良き一日としてください。アーメン。」なんていう(もちろんこの祈りでもいいんですよ)、習慣のような表面的な言葉だけを口にして終わらせる祈りではなくて、深いところへとつなげていくのです。

御言葉は、祈りをもって初めて神の言葉となり、
祈りは、御言葉をもって初めて祈りになるのです。

また、本当に御言葉を食したならば、祈らずにはいられないように導かれますし、本当に祈ったならば、御言葉を食さずにはいられないところへと、導かれていきます。

ともすると、この御言葉と祈りが共に行くのではなく、別々に遊んでいることが多々あります。

御言葉の研究だったり、御言葉はよく読むけれども、祈りにはつながらず、

つなげたくない。

または、祈りには熱いんだけど、御言葉を読むと、何だか眠くなるし、よくわからない。

でもこれは、結局のところ信仰の偏食行為ですね。

偏食をすると、必ず、栄養が偏って、健康ではなくなってしまう。

信仰の偏食行為を続けて行きますと、自分のイメージの中で、信仰行為が行われていきます。

つまり、信仰がポリシーのようになっていきますね。

私の考えるキリスト教信仰とは、私の考える聖書とは、私の考える祈りとは、私の考える教会とは、私の考える、私の考える、私の考えるという風に、いつの間にかイエス様はどこかに飛んで行ってしまい、信仰の主人公はイエス様ではなく、私になります。

聖書の言葉とぶつかった時に、自分が折れてその場にひれ伏すこともなく、祈りのうちに聞こえてくる小さな神の御声に心砕くのもなく、私の思いと私の願いと私の考えばかりが、先行するようになります。

「コロナウィルスとキリスト」という本を書いた **John Piper** 牧師の言葉を以前紹介したことがあります、その **John Piper** 牧師が、他の著書でこんなことを言っています。

「私が何よりも大事にしていることは、神の言葉が私の祈りを導き、神の言葉が私の祈りを満たし、支え、道案内してくれるよう祈ることです。」

また、こうもおっしゃいます。

「聖書を開いてみてください。そこで出会う御言葉ごとに、立ち止まって、それを祈りに変えてください。」

私たちキリスト者は、祈ったならば、御言葉に出て行き、御言葉に出て行ったらならば、祈りにつなげていかなければなりません。

そこにこそ恵みがあり、そこにこそ道があります。

Conclusion

御言葉を読んだり祈っても、自己満足や自分の経験値やただの知識で終わってしまうならば、それは、聖書を読んだことにもならなければ、祈ったことにもならないですね。

中には、聖書知識に長けているが、祈りに熱心な人のことを無知だと言い、祈りに熱心な人は、聖書知識に長けている人を頭でっかちと言います。

でも、これ両方とも、信仰の偏食行為です。

イエス様は、「心を尽くし、命を尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」とおっしゃいました。

つまり、御言葉と祈りは、一緒に行くということです。

聖書を読まない人、祈らない人が多いというのも、心痛むことですが、聖書を読んでも、祈っても、横道にそれていく人も意外に多いという事実も、私たち知っていなければなりません。

本来、聖書を神の言葉として教え、祈りを教えるのが神学という学問ですが、皮肉なことに、今、世界の神学を席卷しているのは、聖書を神の言葉とせず、祈りなんか教えない自由主義神学です。

こんな皮肉なことってありますか？

じゃあ、こんな皮肉なことが、どこから始まっていると思います？

御言葉を祈りに繋げず、祈りを御言葉に繋げないところから、始まっているんです。

でも、ダニエルは違いました。

また、ダニエルを通して、神様が示そうとしておられることも違います。

御言葉があるところに祈りがあり、祈りがあるところに御言葉があること、これを神様は、示しておられます。

そして、私たちに、御言葉と祈りを繋げる信仰者であることを期待しておられます。

だからぜひ、御言葉と祈りを繋げた時にこそ、与えられる恵みをたくさん受け、そこに開かれる道を、共に歩んでいきましょう。

お祈りしましょう。

祝祷：心を尽くし、命を尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。